

**[B年] 聖霊降臨節第9主日(2023年7月23日)****【旧約聖書日課】 ヨシュア記 2章1～14節**

<sup>1</sup>ヌンの子ヨシュアは二人の斥候をシティムからひそかに送り出し、「行って、エリコとその周辺を探れ」と命じた。二人は行って、ラハブという遊女の家に入り、そこに泊まった。<sup>2</sup>ところが、エリコの王に、「今夜、イスラエルの何者かがこの辺りを探るために忍び込んで来ました」と告げる者があったので、<sup>3</sup>王は人を遣わしてラハブに命じた。「お前のところに来て、家に入り込んだ者を引き渡せ。彼らはこの辺りを探りに来たのだ。」<sup>4</sup>女は、急いで二人をかくまい、こう答えた。

「確かに、その人たちはわたしのところに来ましたが、わたしはその人たちがどこから来たのか知りませんでした。<sup>5</sup>日が暮れて城門が閉まるころ、その人たちは出て行きましたが、どこへ行ったのか分かりません。急いで追いかけたら、あるいは追いつけるかもしれません。」

<sup>6</sup>彼女は二人を屋上に連れて行き、そこに積んであった亜麻の束の中に隠していたが、<sup>7</sup>追っ手は二人を求めてヨルダン川に通じる道を渡し場まで行った。城門は、追っ手が出て行くとすぐに閉じられた。

<sup>8</sup>二人がまだ寝てしまわないうちに、ラハブは屋上に上って来て、<sup>9</sup>言った。

「主がこの土地をあなたたちに与えられたこと、またそのことで、わたしたちが恐怖に襲われ、この辺りの住民は皆、おじけづいていることを、わたしは知っています。<sup>10</sup>あなたたちがエジプトを出たとき、あなたたちのために、主が葦の海の水を干上がらせたことや、あなたたちがヨルダン川の向こうのアモリ人の二人の王に対してしたこと、すなわち、シホンとオグを滅ぼし尽くしたことを、わたしたちは聞いています。<sup>11</sup>それを聞いたとき、わたしたちの心は挫け、もはやあなたたちに立ち向かおうとする者は一

人もおりません。あなたたちの神、主こそ、上は天、下は地に至るまで神であられるからです。

<sup>12</sup>わたしはあなたたちに誠意を示したのですから、あなたたちも、わたし一族に誠意を示す、と今、主の前でわたしに誓ってください。そして、確かな証拠をください。<sup>13</sup>父も母も、兄弟姉妹も、更に彼らに連なるすべての者たちも生かし、わたしたちの命を死から救ってください。」

<sup>14</sup>二人は彼女に答えた。

「あなたたちのために、我々の命をかけよう。もし、我々のことをだれにも漏らさないなら、主がこの土地を我々に与えられるとき、あなたに誠意と真実を示そう。」

**【使徒書日課】****フィリピの信徒への手紙 4章1～3節**

<sup>1</sup>だから、わたしが愛し、慕っている兄弟たち、わたしの喜びであり、冠である愛する人たち、このように主によってしっかりと立ちなさい。

<sup>2</sup>わたしはエポディアに勧め、またシンティケに勧めます。主において同じ思いを抱きなさい。

<sup>3</sup>なお、真実の協力者よ、あなたにもお願いします。この二人の婦人を支えてあげてください。二人は、命の書に名を記されているクレメンスや他の協力者たちと力を合わせて、福音のためにわたしと共に戦ってくれたのです。

**【福音書日課】 ルカによる福音書 8章1～3節**

<sup>1</sup>すぐその後、イエスは神の国を宣べ伝え、その福音を告げ知らせながら、町や村を巡って旅を続けられた。十二人も一緒だった。<sup>2</sup>悪霊を追い出して病気をいやしていただいた何人かの婦人たち、すなわち、七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア、<sup>3</sup>ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、それにスサンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒であった。彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## ヨシュア記 2章1～14節

1ヌンの子ヨシュアは、二人の男に「エリコに行き、その地を探りなさい」と命じ、斥候としてひそかにシテムから送り出した。二人は行って、ラハブという名前の遊女の家に入り、そこに泊まったが、<sup>2</sup>それをエリコの王に、「申し上げます。今夜イスラエル人の何者かが、この地を探ろうと忍び込みました」と告げる者があった。<sup>3</sup>エリコの王はラハブのもとに人を遣わし、「お前のところに来て、家に入り込んだ男たちを引き渡せ。その者たちはこの地のすべてを探るために来たのだ。」<sup>4</sup>女は二人をかくまい、こう答えた。「確かに、その人たちは私のところに来ましたが、どこから来たのかは知りません。<sup>5</sup>暗くなって城門が閉まる頃、あの人たちは出て行きましたが、どこへ行ったのかは知りません。急いで後を追えば、追いつけるでしょう。」<sup>6</sup>実は、女は二人を屋上へ上らせ、屋根に積んであった亜麻の束で隠していたのである。<sup>7</sup>人々は二人を追いかけ、ヨルダン川に通じる道を通り、浅瀬の渡し場へと向かった。追っ手が出て行くと城門は閉じられた。

<sup>8</sup>二人がまだ寝てしまう前に、女は彼らのいる屋上へ上り、<sup>9</sup>二人に言った。「主があなたがたにこの土地を与えられたこと、そのため、私たちが恐怖に襲われ、この地の住民たちもあなたがたの前に恐れおののいていることを、私は知っています。<sup>10</sup>あなたがたがエジプトから出て来たとき、主があなたがたの前で葦の海の水を干上がらせたこと、また、あなたがたがヨルダン川の向こう側にいたアモリ人の二人の王、シホンとオグを滅ぼし尽くしたことを、私たちは聞いています。<sup>11</sup>それを聞いて、私たちの心は挫けてしまい、もはやあなたがたに立ち向かう勇

気は誰にもありません。あなたがたの神、主こそ、上は天、下は地において神であられるからです。<sup>12</sup>私はあなたがたに誠意を尽くしたのですから、あなたがたも、私の家族に誠意を尽くすと、今、主の前で誓ってください。そして、確かなしるしをください。<sup>13</sup>私の父、母、兄弟、姉妹、そして彼らに連なるすべての者を生かし、私たちの命を死から救ってください。」<sup>14</sup>二人は彼女に言った。「あなたがたのために我々の命を懸けよう。もし、あなたがたが我々のことを誰にも漏らさなければ、主がこの地を我々に与えられるとき、あなたがたに慈しみとまことを示そう。」

## フィリピの信徒への手紙 4章1～3節

<sup>1</sup>ですから、私为爱し、慕っているきょうだいたち、私の喜びであり、冠である愛する人たち、このように、主にあってしっかりと立ちなさい。

<sup>2</sup>私はエボディアに勧め、またシンティケに勧めます。主にあって同じ思いを抱きなさい。<sup>3</sup>なお、真の協力者よ、あなたにもお願いします。彼女たちを助けてあげてください。二人は、命の書に名を記されているクレメンスや他の協力者たちと力を合わせて、福音のために私と共に戦ってくれたのです。

## ルカによる福音書 8章1～3節

<sup>1</sup>その後、イエスは神の国を宣べ伝え、福音を告げ知らせながら、町や村を巡られた。十二人も一緒だった。<sup>2</sup>悪霊を追い出して病気を癒してもらった女たち、すなわち、七つの悪霊を追い出してもらったマグダラの女と呼ばれるマリア、<sup>3</sup>ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、それにスサンナ、そのほか多くの女たちも一緒であった。彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に仕えていた。

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

- ・7月23日「聖霊降臨節第9主日」の日課主題は「女性の働き」。
- ・旧約聖書日課は、「ヨシュア記」から、ヨシュアの遣わした斥候がエリコ城内に潜入した際の出来事を伝える箇所。使徒書日課は、「フィリピの信徒への手紙」から、パウロが手紙の末尾に教会の女性信者らの名を挙げて挨拶を記す箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、主イエスに従っていた女性の弟子たちについて紹介する箇所。

**旧約日課(ヨシュア2章より)**

- ・「ヨシュア記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「前の預言者」の第一に置かれた歴史物語文書。モーセに率いられてエジプトを出て40年の荒れ野の旅を続けたイスラエルの民を、モーセの後継者としてヨシュアが約束の地カナンに導き入れ、定住地を得させていく物語として展開する。「モーセ物語」同様、史実として確認できないことがほとんどである。ユダ・イスラエル諸部族諸地域で受け継がれてきたさまざまな伝承物語が、最終的には王国時代以降のダビデ王家の観点から一つに統合され、「士師記」を経て王国年代記である「サムエル記」および「列王記」に続くように編纂されたと考えられる。「ヨシュア記」の描くイスラエルのカナン侵入は、皮相的には軍事力にものを言わせた侵略奪奪であったかのように描かれるが、実際に叙述されているのは、多くの入植地で先住民と共存していく姿である。考古学的研究からも、この時代に軍事侵攻による都市の破壊・再建の痕跡は確認されていない。また、「ヨシュア記」には、各部族の定住に至る経緯が異なり、必ずしもヨシュアのもとに足並みを揃えて侵入・定住したようには描かれていない。おそらくは、諸都市に結びついたイスラエル諸部族にそれぞれの定住の歴史があり、それに基づく伝承物語があったのだろう。
- ・日課箇所の物語は「エリコ」を場面設定としている。「エリコ」は、ヨルダン渓谷の海拔マイナス250メートルに位置するオアシスに建設されてきた都市で、石器時代の集落痕跡が発掘されるなど、古代オリエントでも最も古いとされる町。前8000年ごろには防壁で囲った集落を形成していたと考えられている。何度かの破壊と再建を経て、前1900年頃に周壁を備えた城壁都市が建設されているが、前1560年頃にヒクソス(エジプト第15王朝の支配民族)の侵攻を受けて大規模に破壊され、前12世紀頃までエジプトの支配下にあったとされる。「ヨシュア記」の描くイスラエルのエリコ攻略戦の物語は、設定年代が前12世紀ごろであるが、考古学者の中には、ヒクソスによる軍事侵攻の伝説に基づくものなのではないかと推測する者もいる。
- ・日課箇所は、斥候について名前など詳細を伝えない一方、彼らを助けたエリコの女性については「ラハ

ブ」という名を挙げている。この「ラハブ<sup>רַחַב</sup>」は、「ヨブ記」などに出てくる怪物「ラハブ<sup>רַחַב</sup>」とは綴りが異なる。エリコの女性「ラハブ」は、「ヨシュア記」中のエリコ関連で詳しく描かれるが、旧約の他文書で触れられることはない。新約文書中では、「娼婦ラハブ」としてエリコの逸話を踏まえて引用される例があるほか(ヘブ11:31、ヤコ2:25)、「マタイ福音書」冒頭の「イエスの系図」中に「ラハブ」の名が現れる(マタイ1:5)。

**使徒書日課(フィリピ4章より)**

- ・「フィリピの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の6番目に置かれた書簡文書。パウロが、シリア・アンティオキア教会から派遣された「バルナバ宣教団」を離れて独自の宣教活動として展開した「マケドニア伝道」でフィリピに形成した共同体に宛てて記されている。
- ・パウロのフィリピ伝道に関する逸話は、「使徒言行録」16章が伝えている。それによれば、この地にはユダヤ人の会堂が成立していなかったと考えられるが、パウロは、安息日の集会を共にしている少数のユダヤ人女性の集団を探し当て、その中から紫布商人リディアとその家族に洗礼を授け信者としている。
- ・冒頭の宛先に「教会(エクレシア)」の術語は見られない(パウロ書簡のうち、コリント一、同二、ガラテヤ、テサロニケー、同二は「教会」を宛名にしている)。しかし、宛名には、多用される「聖なる者たち」に加えて、本書簡には例外的に「監督たち(<エписコポス)と奉仕者たち(<ディアコノス)」が含まれている。「監督」は、パウロ書簡集中では他に牧会書簡でしか用いられず(1テモ3:2、1テト1:7)、新約全体でも他例は2例に過ぎない(使徒20:28、1ペト2:25)。「奉仕者」は、パウロ書簡で広く用いられる用語であるが、一般に「仕える者」の意で多様に用いられており、教会に置かれた職名のように用いられる例は少ない(該当する例は、ローマ16:1、1テモ3:8,12など)。この二つの術語を合わせて用いているのは、「テモテへの手紙一」(3章)がある。パウロの関与した教会でこれらの術語を用いた職位が形成されていたのかどうかは不明であるが、少なくともフィリピの共同体が一定の組織体制を有していたことは確かである。
- ・日課箇所に挙げられる人物は、いずれも詳細が知られていない。「エボディア(綴りは Euvodia, または Euvwdia)」(「よい香り」の意?)と「シンティケ(Suntu, ch)」は女性の名。「真実の協力者」(グネーシオス・シュズーゴス)の直訳は「純然たる軛を共にする者」であるが、固有名として用いられているのかもしれない。「クレメン」は、ラテン系(ローマ人)によくある名で、使徒教父の中に複数の「クレメン」が知られているが、おそらく別人。他の「協力者(シュネルゴス)」(複数形)がどのような人々であるかは、分からない。
- ・「命の書(ビブロス・ゾーエース)」は、「ヨハネ黙示録」で繰り返し取り上げられている(黙3:5、13:8、17:8、20:12,15、21:27)。

**福音書日課(ルカ 8 章より)**

・日課箇所は、主イエスのガリラヤ宣教を総括する章句(8:1~21)の冒頭に位置し、主イエスの宣教活動に伴っていたのが「十二人」と「多くの婦人たち」であったことを伝えている。日課箇所に相当するまとめ句は、他の福音書には見られない。このまとめ句の後、8:19~21 には、主イエスのところに「母と兄弟たち」が訪ねてくる逸話が置かれており、日課箇所は、主イエスに従った「婦人たち」が主イエスの「母(マリア)」とは無関係に従った者たちであったことを示唆している。

・ここに名の挙げられる三人の女性のうち、「マリア」と「ヨハナ」は、「空の墓の発見」伝承逸話でも名が挙げられている(24:10)。

・「マグダラのマリア」は、四福音書が「空の墓の発見」伝承で共通して明示している証言者で、初代教会においてペトロをはじめとする使徒らと並んで重要な役割を果たした人物と考えられているが、詳細は知られておらず、日課箇所の記述が唯一の手がかりとなる。この「七つの悪霊を追い出していただいた」という叙述は、「汚れた霊が戻って来るたとえ」(ルカ 11:24~26)で「自分より悪いほかの七つの霊を連れて来て」と描かれるように、数字自体は象徴的な意味で用いられており、「マリア」の抱えていた問題(悪霊!)が「七つ」であったと考えて何らかの推測をすることは意味がない。そうだとすると、「汚れた霊が戻って来るたとえ」との類比からは、「マリア」の存在が初代教会における「悪霊追放」理解において重要な意義を持っていたことが推察されるだろう。

・「ヘロデの家令クザの妻ヨハナ」の紹介が事実であるならば、初代教会のユダヤ人社会における立ち位置を推察するうえで重要な意味を持つ。すなわち、初代教会は、ユダヤ人社会においてヘロデ王家を中心とする権力層に一定の接点を有していたのである。同様のことは、「ヨハネ福音書」が伝える「大祭司の知り合いだった」とされる弟子の存在を伝える記述などからも推察される(ヨハネ 18:15)。

**来週の誕生日 (7月 23日~29日)****主日礼拝の讃美歌から**

- ・21-3 番「扉を開きて」(= I 61「かがやくみとのよ」)は、17-18 世紀ドイツのカトリックと対立の激しい地方で牧師となった多作の讃美歌作家シュモルクの作詞。曲は、17 世紀ドイツの改革派の牧師ネアンダー(本名はノイマン)が詩編歌用に作曲。ネアンダーが住んだデュッセルドルフ近郊の谷は、彼にちなんで「ネアンデル谷」と呼ばれるようになったが、そこで発見されたヒトの化石が「ネアンデルタール人」。
- ・21-58 番「み言葉をください」(= II 80)は、『讃美歌第二編』編纂時の公募讃美歌。作詞の今駒は、教団の牧師で、川崎、豊島岡、単立志村清水の各教会で牧会。作曲の小山は阿佐ヶ谷教会員の音楽家。

・21-393 番「こころを一つに」は、18 世紀ドイツでヘルンフト兄弟団を設立したツインツェンドルフの作詞。この兄弟団の信仰は、J.ウェスレーにも影響を及ぼした。

**21-3「扉を開きて」****Tut mir auf die schöne Pforte**

- 1) Tut mir auf die schöne Pforte, / führt in Gottes Haus mich ein; / ach wie wird an diesem Orte / meine Seele fröhlich sein! / Hier ist Gottes Angesicht, / hier ist lauter Trost und Licht.
- 2) Ich bin, Herr, zu dir gekommen, / komme du nun auch zu mir. / Wo du Wohnung hast genommen, / da ist lauter Himmel hier. / Zieh in meinem Herzen ein, / laß es deinen Tempel sein.
- 3) Laß in Furcht mich vor dich treten, / heilige du Leib und Geist, / daß mein Singen und mein Beten / ein gefällig Opfer heißt. / Heilige du Mund und Ohr, / zieh das Herze ganz empor.
- 4) Mache mich zum guten Lande, / wenn dein Samkorn auf mich fällt. / Gib mir Licht in dem Verstande / und, was mir wird vorgestellt, / präge du im Herzen ein, / laß es mir zur Frucht gedeihn.
- 5) Stärk in mir den schwachen Glauben, / laß dein teures Kleinod mir / nimmer aus dem Herzen rauben, / halte mir dein Wort stets für, / daß es mir zum Leitstern dient / und zum Trost im Herzen grünt.
- 6) Rede, Herr, so will ich hören, / und dein Wille werd erfüllt; / nichts laß meine Andacht stören, / wenn der Brunn des Lebens quillt; / speise mich mit Himmelsbrot, / tröste mich in aller Not.

**21-393「こころを一つに」****Herz und Herz vereint zusammen**

1. Herz und Herz vereint zusammen / sucht in Gottes Herzen Ruh! / Lasset eure Liebesflammen lodern auf den Heiland zu! / Er das Haupt, wir Seine Glieder, / Er das Licht und wir der Schein; / Er der Meister, wir die Brüder, Er ist unser, wir sind Sein.
2. Kommt, ach kommt, ihr Gnadenkinder, / und erneuert euren Bund, / schwöret unserm Überwinder / Lieb und Treu aus Herzensgrund! / Und wenn eurer Liebeskette Festigkeit und Stärke fehlt, / o so flehet um die Wette, bis sie Jesus wieder stählt!
3. Legt es unter euch, ihr Glieder, auf so treues Lieben an, / daß ein jeder für die Brüder auch das Leben lassen kann. / So hat uns der Freund geliebet, / so vergoß Er dort sein Blut; / denkt doch, wie es Ihn betrübet, / wenn ihr euch selbst Eintrag tut.
4. Halleluja, welche Höhen, welche Tiefen reicher Gnad, / daß wir dem ins Herze sehen, der uns so geliebet hat; / daß der Vater aller Geister, der der Wunder Abgrund ist, / daß Du, unsichtbarer Meister, uns so fühlbar nahe bist.
5. Ach Du holder Freund, vereine Deine Dir geweihte Schar, / daß sie es so herzlich meine, wie's Dein letzter Wille war. / Ja verbinde in der Wahrheit, die Du selbst im Wesen bist, / alles, was von Deiner Klarheit in der Tat erleuchtet ist.
6. Liebe, hast Du es geboten, daß man Liebe üben soll. / O so mache doch die toten, trägen Geister lebensvoll: / Zünde an die Liebesflammen, daß ein jeder sehen kann: / Wir als die von einem Stamme / stehen auch für einen Mann.
7. Laß uns so vereinigt werden, wie Du mit dem Vater bist, / bis schon hier auf dieser Erde / kein getrenntes Glied mehr ist. / Und allein von Deinem Brennen / nehme unser Licht den Schein; / also wird die Welt erkennen, daß wir Deine Jünger seien.